



## 「中国帰国者」問題の研究可能性 —生成的な境界文化の探求をめざして—

南 誠 (梁雪江)

長崎大学多文化社会学部  
lsk-minami@nagasaki-u.ac.jp  
(受理：2017年12月12日，採択：2018年2月2日)

---

### 要 旨

本稿の目的は、「中国帰国者」の生成的な境界文化の探求を手がかりに，ポスト西洋社会学との関係について検討することである。境界文化とは，筆者が博士論文で提起した概念であり，近代の国民国家システムに埋め込まれた人々の存在ではなく，境界によって作り出された統合化と差異化の過程を生きる人々の実践文化である。明確な境界をもった本質主義的実体ではなく，そこにかかわる人々と文化の相互交渉や浸透を通じて創造される異種混交のものである。本稿はこうした概念を用いて，中国帰国者の移動体験と境界文化のポリティクスを紹介した上で，ポスト西洋社会学における生成的な境界文化の探求の可能性について検討する。

キーワード：中国帰国者，境界文化，越境，パフォーマティヴィティ，ポスト西洋社会学

---

## 1. はじめに

### (1) 本稿の目的

本稿の目的は，筆者のこれまでの研究成果を踏まえつつ，「中国帰国者」問題の研究可能性，とくにその生成的な境界文化の探求を手がかりに，ポスト西洋社会学との関係について検討することである。本稿をまとめるにあたって，2017年11月22日，成城大学で開催された国際カンファレンス「ポスト西洋社会学へ：東と西との対話」での議論を踏まえていることを予め断っておきたい。

ポスト西洋社会学 (Post-Western Sociology) に関する議論は管見の限り、日本ではまだほとんど行われていない<sup>1</sup>。これに対して、隣の中国では近年、フランスの社会学者との共同研究を通じて、ポスト西洋社会学について議論を積み重ねてきている (謝・羅蘭 2017)。その成果によれば、ポスト西洋社会学とは、西洋社会学が非西洋社会に伝播／拡散していくなかで、西洋と非西洋の社会学者の文化的交流に基づいて形成／発展した新しい社会学であると定義されている (謝 2017: 4)。西洋社会学をヘゲモニーとするグローバルな知的秩序と認識の不平等 (epistemic injustice) 関係の改善や、方法としてのコスモポリタニズムにおける近代的多元性と集团的叙事の多様性の析出、および、コスモポリタニ的転回とポスト西洋的知識空間において、非西洋社会の社会学の現地化や、西洋と非西洋との関係を理解するのに、有効な概念である (謝 2017; 羅蘭 2017a)。この概念を用いることで、より広い視野を獲得し、社会学理論をさらに発展させ、西洋／非西洋の二項対立構造を超克していくことも可能となる (謝 2017: 31)。

## (2) 中国帰国者の境界文化

中国帰国者とは、日本と中国が国交を締結した 1972 年以降に、日本に永住・定住するようになった中国残留日本人とその家族を指す。さらにここでいう中国残留日本人とは、戦前中国に渡った日本人のうち、戦後も長い間中国での残留を強いられた人たちである。今日の日本では約 10 万人の中国帰国者が住んでいると推測されている。

中国残留日本人は「日本人」として生まれながらも、日本と中国という二つの国民国家の包摂と排除によって、中国での残留を強いられた。中国では公民として包摂されながらも、時には中国人民という範疇から排除されていた。そして日本に永住帰国してからも、それに同行する家族を含めて、「日本人」になったというより、中国残留日本人が抱く日本人への同一化という願いはむしろ、日本人との心理的距離感を醸成してしまっている。このように、中国帰国者は日本とも中国とも関係を保持しており、しかしその両方の社会において、特殊なグループとして位置づけられている。

これまでの中国帰国者研究の多くは中国帰国者を所与として扱ってきたのに対して、筆者は、中国帰国者を日本や中国という国民国家とのかかわりで、歴史／社会的に創造されたものであるという立場をとっている。そのために、近代のネーションビルディングにおける領域と国民をめぐる境界線の確定に着目し、そうした境界と人びとの相互作用と当事者の実践文化を分析する概念として、境界文化を提案した。

境界文化とは近代の国民国家システムに埋め込まれた人々の存在ではなく、境界によって作り出された統合化と差異化の過程を生きる人々の実践文化である<sup>2</sup>。明確な境界をもった本質主義的実体ではなく、そこにかかわる人々と文化の相互交渉や浸透を通じて創造される異種混交のものである。

境界文化を分析する際は、固定された境界ではなく、「国民国家のゆらぎ」「境界のゆらぎ」に注目する。国民、エスニシティやディアスポラといった概念はけっして本質的な集団

を意味するものではない。むしろブルーベイカーの指摘に従って、それらは国家の内部と国家間で政治的・文化的枠組みとして制度化されたものであり、予め境界づけられた集団ではなく、実践によって構築されるものとして捉える (Brubaker 1992=2005)。そうした境界を分析するにあたっては、バルトのエスニシティ境界論 (Barth 1969=1996)、コーエンの境界シンボリック的構築論 (Cohen 1985=2005) やイサジフのエスニシティ二重境界論 (Isajiw 1974=1996) も援用して考えると、その構築性がよりわかりやすい。つまり境界はけっしてマクロ的に付与され、一貫して変わらないものではなく、それは異なる集団と人の相互作用によって生成維持されるものであり、場によっては変化する可能性を孕んでいる。そうした位置づけの変化を分析するに当たり、ホールのポジショニング理論 (Hall 1990=1998) とバトラーのパフォーマティヴィティ (Butler 1990=1999: 58) が有効である。

以下はこうした視角に立脚して、中国帰国者の移動体験と境界文化のポリティクスについてまず紹介してから、ポスト西洋社会学との関係について考えてみたい。

## 2. 中国帰国者をめぐる包摂と排除—移動体験を手がかりとして—

### (1) 中国帰国者の移動経験

中国帰国者の特質は、近代化を目指す日本の海外への膨張と縮小の過程に起源し、戦後の日本や中国という国民国家の境界によって包摂／排除されたことにある。その移動経験を時間の流れに沿ってまとめれば、大きく五つの時期に分けられる。つまり第一期の満州移民期 (1930年代から1945年8月まで)、第二期の中国居留民期 (1945年9月～1958年)、第三期の中国残留期 (1959年～)、第四期の日本への永住・定住期 (1972年～)、第五期のディアスポラ的な移動 (2000年～) である。

第一から第三の時期までの移動は個人の意志よりも、国民国家の政策と国際情勢によって規定されていた。周知の通り、中国残留日本人の多くは戦中に、その家族と一緒に満州地域に渡り、戦後の混乱のなかで、家族と死別・離別して現地の家庭に入った人たちである。厚生労働省のまとめによれば、その6割以上が満蒙開拓団関係者であった (厚生省 1987: 5)。こうした貧しい農民を中心に構成された開拓団の送出を可能にしたのは言うまでもなく、当時の大日本帝国の国策があったからである。しかし国策で送出されたにもかかわらず、中国残留日本人となった人たちは戦後の引揚事業のなかで、援護対象から排除され、社会的にも忘却されていった。そのために、中国での残留を強いられたのである。

これらの人たちが日本に「再」包摂されるようになったのは、第四期の1972年以降の日本への永住・定住期である。しかし日中国交が締結したからと言って、中国残留日本人の日本へのアクセスが容易になったものの、その支援策がすぐに改善されたわけではなかった。その後、民間団体「日中友好手をつなぐ会」などの運動やマスメディアの力によって、日本政府が動かされ、1981年に開始された中国残留孤児の訪日調査を契機に、中国残留日本人政策が徐々に改善されていった。これに伴って、中国帰国者の日本への永住・定住も増加し、90年代のピックを迎えて、21世紀に入るとその移動が沈静化したのである。

最後の第五期は、2000年以降に顕著に表れるようになったディアスポラ的な移動をする時期である。この時期になると、中国帰国者は日本だけではなく、活躍と安住の場をそれ以外の国や場所に求めて移住するか、移動を繰り返す人が増えるようになった。その多くは中国帰国者2世と3世である。彼(女)らのハイブリッド性が企業などに認められ、海外駐在員として、中国などに定住する人が増えた。また日本で一定の財力を蓄えてから、中国で起業を試みる2世と3世や、退職してから、老後の生活を中国で過ごそうとする2世もいる。もちろん欧米諸国へ移住した人もいる。中国帰国者1世でさえも、2008年の「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律」の改善を受けて、年間2~3ヶ月の渡中が認められるようになり、日中間をまたがる移動が活発化したのである。

## (2) 越境と残留

中国残留日本人にとっての本当の越境行為は、1945年の戦乱期において、現地の中国人家庭に入ったことに始まる。もちろん日本から移民として中国に渡った経緯を考慮すれば、その越境行為は1945年以前に遡るが、しかし日本帝国を背景にするその移動は国内の移動でしかなく、真の越境行為とは言いがたい。そうした意味を考慮して、本稿ではその時期についての議論を割愛し、中国人家庭に入った経緯の類型化を通して、彼らを包摂する中国社会の実態の明晰化を試みる。

中国人家庭に入った経緯に関する分類はすでに多くの先行研究で指摘されている。ここでは先行研究の類型を参照しつつ、筆者が収集した事例を総合的に考えると、その類型は大きく①中国人に助けを求めて入った求助型、②中国人に助けられて入った救助型、③徴用あるいは就職をしているうちに中国人の家庭に入ったり、中国人と結婚したりした就職・婚姻型、④混乱した社会情勢のなかで拉致されたり、自己の意志とはまったく関係なく、知らぬ間に現地の売られてしまったことで入った拉致・売買型の4つに分けられる。このうちの①求助型と②救助型にはさらにいくつかの類型が見られる。

求助型はさらに5類型に分けられる。まず中国残留日本人孤児によく見られる類型であるが、逃避行あるいは難民収容所で、食料不足が理由で餓死するのを避けるために、現地の中国人に子供を預けた難民型である。そして中国残留婦人の場合であるが、夫が現地で召集され、1人(あるいは子供を連れて)でどうしようもなく、現地の家庭に入った離別型、夫と一緒に逃避行の道中で、暴徒に犯されたのをみた夫に見放された後に現地の人と結婚した見捨てられ型、夫に「死ぬほどなら中国人に助けを求めろ!結婚してもよか。とにかく生きていろ、そのうちにきっと帰れる日がくるからな」と言われ、中国人と結婚した勧められ型、家族や親族と一緒に逃避行し、あるいは難民収容所で、食糧難という理由で、家族親族のためと思って、現地の家に入った家族・親族救済型がある。

救助型には、佐渡事件と葛根廟事件のような殺りくの戦場で、親の死体の陰で生き残った子が助けられた撃滅型、逃避行の途中、親とはぐれた子や、足手まといになると殺されかけた子が現地の人に救われた避難型、また、逃避行や収容所で親が餓死、凍死し、残された子



らを中国人が拾って育てた難民型がある。そして中国残留婦人によく見られるが、現地の中国人に助けられて、その感謝として中国人と結婚して入った感謝型がある。

これらの類型から明らかなように、日本が敗戦したことで、武力的な保護をなくした日本人は様々な経緯で中国人の家庭へと包摂されていった。もちろんこの時点で中国人家庭へと包摂されたのは1972年以前に永住帰国した引揚者をも含む。これらの日本人を受け入れた中国人家庭の事情は、国境と敵対関係を越えた愛と救命と言われているが、それだけではなく、貧困による結婚難、子どもが授けられない家庭の事情などもその一因であった。

こうして中国人の家庭に入った日本人孤児と日本人婦人の残留を決定的にしたのは、現地の事情と言うより、日本政府側に大きな原因があった。1958年までの後期集団引揚の援護対象からの排除に加え、1959年に「未帰還者特別措置法」を実施したことで、彼らを排除・忘却していったのである。同法律の実施によって、1万人以上が戦時死亡宣告され、戸籍が抹消された。また「自己の意志により帰還しない人」の認定作業も積極的に推進され、その際の選定基準は定住を前提とする「良き国民」の基準が機能していた。また日中間に国交が締結されていなかったことで、中国に残留した人びとの日本へのアクセスが困難だったからである<sup>3</sup>。

このように、中国で残留した人たちは日本からの排除と忘却によって、その残留を強いられたのである。しかしこれらの人びとは中国において、中国公民としての権利を獲得して法的に包摂される一方、その階級性と政治的態度によっては、「中国人民」の範疇から排除もされていた。またかつての侵略者の子供・関係者と見られることで、社会的なまなざしは極めて厳しかった。こうした輻輳的な包摂と排除の力学によって、中国残留日本人とその子孫のほとんどは中国において、社会の周縁へと追いやられていったのである。

### (3) 「再」包摂と他者化

中国帰国者にとっての第二の越境行為は、第四期の1970年代以降の日本への永住・移住期になる。その永住・定住は祖国への帰還物語や親子の再会物語としてよく語られるが、ここではその越境をめぐるプッシュ・プル要因を明らかにして、中国帰国者をめぐる包摂と排除の理解を深めたい。

中国帰国者を日本へと送り出すプッシュ要因に、政治的要因と経済的要因がある。政治的要因とは、中国国内で「日本人」としての差別待遇（その可能性を含めて）を回避するためであり、戦後中国の三反五反や文化大革命といった政治運動において、日本国籍を保有し中国で「日僑」として認定された人は「外僑」保護政策の下で、運動の対象から外されていた。もちろん「反革命分子」の疑いがある人は例外として、監視もしくは調査・批判の対象にされる例もある。また中国国籍を保持しながらも、「日本人」の疑いのある人はしばしば、批判の対象にされたり、中国国内での社会上昇と自己実現の可能性が見込めなくなったりする人が多数いた。さらに日中両国の相互認識とくに戦争をめぐる歴史認識が対立する状況において、中国帰国者が苦しい立場に置かれていた。こうした影響は2世や3世にも及び、そ

の環境からの脱却を目指して、日本への移住を決めたのである。

次は経済的要因になる。1979年中国が改革開放政策を実施するようになってから、中国国内の経済が急速に発展していった。しかし農村部は「三農（農村・農業・農民）問題」に象徴されるように、依然として貧しかった。そのため、農村に住む人は大都市への移住を希望するが、農村・都市戸籍制度による移動の制約があったため、その移住はきわめて困難であった。そうした潮流のなか、農村部に住む中国帰国者は国内の大都市ではなく、経済大国である日本への移住を目ざしたのである。こうした移動の動機は都市部に住む中国帰国者にも当てはまる。ただし都市住民にとって、その移住は貧困からの脱却というより、より良い生活と自己実現が目された。

一方、中国帰国者を日本へ引きつけるプル要因として、まず中国残留日本人政策の改善といった政治的要因が挙げられる。中国帰国者1世である中国残留日本人は、引揚者政策の延長線上で対応されていた。中国帰国者2世と3世については、1991年、「中国残留日本人孤児・婦人」およびその2世・3世や、フィリピン等の日系人およびその家族を念頭に、入管法改正が考案され（梶田 1999:52）、この法改正により、定住の在留資格が創設され、3世までの就労資格が与えられたのである。

次は、民間団体等の訪中調査や手紙のやりとりによる呼びかけ要因である。中国残留日本人政策が改善されても、それが必ずしも当事者に伝えられたとは限らない。また当事者も、日本への永住・定住をとくに意識しなかった人もいる。その一例として、『大地の子』の著者山崎豊子の言葉「日本に帰る気持ちはないのですか」をきっかけに、日本への永住帰国を考えるようになった中国残留孤児もいる。1990年代に入ってから、こうした事例が多く見られる。その呼びかけは民間団体と厚生省を中心に行われ、とくに1990年代の「3カ年帰国促進計画」実施後、その呼びかけが活発に行われたのである。

日本国内の経済的な要因も影響していたと考えられる。1980年代のバブル最盛期と1990年代以降のバブルの崩壊といった流れの中、単純労働力需要の高まりと変化が中国帰国者を必要としていた。過疎化が進む農村や地方都市にとっても、中国帰国者の存在意義が大きかったと言えよう。しかしこうした包摂の過程で、異文化保持者としての彼（女）らは、文化や言語の同一性による「内的国境」の境界設定によって排除され、異質な集団として位置づけられた。言い換えれば、「再」包摂は他者化の過程でもあったのである。

### 3. 境界文化のポリティクス

#### (1) 位置付与と受容

「再」包摂＝他者化は意味付与の過程でもあった。1980年代以降、中国残留日本人孤児の訪日調査の開始にともなって、中国残留日本人の存在がマスメディアに大々的に取り上げられるようになった。それ以前の民間団体「日中友好手をつなぐ会」の社会活動での中国残留日本人表象や法的位置づけに加え、こうしたメディアの再生産によって、中国残留日本人という名称が定着し、それに対する社会的な意味づけがなされた。この過程で付与された物語

を簡潔にまとめると、戦争被害者や棄民といった犠牲者的なストーリーと、帰国を熱望する祖国のストーリーとなる<sup>4</sup>。これらの物語は日本のナショナルヒストリーの一部（戦争被害者としての日本人）として包摂され、再生産されていった。そしてさまざまな場において、当事者に物語ることを要求するのである。その一例として国籍を確認するための司法の場を取り上げてみる。

戦後の日本政府は、中国国籍の取得が強制的か危機回避であれば、日本国籍の離脱を承認しない方針をとっていた。このような政策によって、残留日本人らが日本国籍を取得（確認）するには、中国国籍の取得が「危機回避」であることを立証しなければならなかった。言い換えれば、中国での生活が「危機」ないし「悲惨」状態であり、自己がいかにそれを強いられたのかの語りが求められたのである。そのため、当事者は国籍確認の際、中国人の家庭に入ったのは「戦乱」や「売られた」といった外的な要因によるもので、その後の生活は「悲惨」で、「日本人」であるがゆえに差別や苦勞が絶えなかったといった物語を語るなければならなかった。そうした状況の危機をうまく証明できなければ、就籍が不許可されてしまう場合もある。極端な例として、中国残留日本人孤児が幼少時代に、「近所の子供にいじめられた記憶がない」（竹川 2003：303）という理由だけで、不許可になった人さえている。

しかし悲惨的な状況を語る当事者にとっての生活は必ずしもその限りではない。中国残留婦人高橋はる（仮名）は「大陸花嫁」として渡満し、現地に入植していた開拓民と結婚した。敗戦の年に、夫は招集され、戦死したため、一人となった彼女は現地の人に救われて再婚した。1950年代に中国国籍を取得して、その後の永住帰国時は中国旅券を使っていた。日本に帰国してからは、法務局の指示で、自己の志望によって中国国籍を取得したため日本国籍を喪失したとして、除籍手続きを取った。その後、この決定を不服に思った高橋は、国籍確認請求訴訟を提訴した。

法廷内での争点は、中国国籍の取得が自己の志望であったかどうかであった。結果は高橋の全面勝訴であったが、法廷では「強迫」と「悲惨」の物語が主張された。例えば、中国人の家庭に入ったのは「売られた」からであり、戦後の中国では日本人として差別を受けて苦勞した。中国国籍を取得したのは、公安局外事課担当者に勧められて断るには断れない状況だったからであるという。しかし、聞き取りの場では、中国人に救われ、中国での生活は貧しかったが、「幸せ」だったとも語られた。

このほかに、国家賠償訴訟運動の場や公的な場においても、犠牲者的な物語が求められた。しかし中国残留日本人のそうした物語性が包摂される一方、その物語から逸脱したものは排除されていった。例えば、同じ開拓団出身の中国残留婦人である斉藤（仮名）と安本（仮名）の場合。斉藤は中国残留婦人の象徴として1980年代後半からメディアに大きく取り上げられ、日本人としての語りや祖国を思うその語りは次々に報道された。一方の安本は取材されたものの、その語りはメディアには登場しなかった。斉藤の語りに比べ、安本は「私」という個や家庭を中心に自己を物語っていた。このように斉藤だけがメディアによって大きく取り上げられたのはまさしく、彼女の語りが中国残留日本人に付与された支配的な

物語に合致したからである<sup>5</sup>。

やや乱暴的にまとめると、1980年代以降の日本において、中国残留日本人に付与された位置とは戦争被害者としての「日本国民」であり、その反射として中国での生活は「犠牲者」らしく悲惨でなければならなかったのである。これこそ日本という国が思い描く在外邦人の理想像でほかない。つまり外国に居住しても、「祖国での定住」を志向し、「祖国」を思い続ける在外邦人像である。これまで論じてきたように、中国残留日本人の体験の中には、こうした理想像に合致する部分は確かに存在する。しかしその生活世界にはそれ以上の豊かな体験が潜在化している。中国帰国者を総合的に捉えるには、こうして沈黙を強いられてきた体験の部分にも光を当てる必要がある。以下はこの視点を考慮して、中国帰国者という集団と個人という二つのレベルにおける境界文化の表出について考察する。

## (2) エスニック変則者としての表出

まず2001年から2008年までの中国残留日本人の国家賠償訴訟運動を手がかりに、中国帰国者の集団的表出について検討する。

この国家賠償訴訟運動から、エスニシティをもたらす2つの条件——①社会組織としてのエスニック集団間の認識上の対立が顕著となる状況、②構成員間で経験や社会的文化的特性の共有意識が作用する——(竹沢 1995: 25)が見いだせる。国家賠償訴訟運動には、中国残留日本人孤児の約9割が参加し、その2世と3世も含めて、全国的な組織が初めて結成された。これを契機に、世代間の対話が始まり、中国帰国者同士ないし世代間の絆が強化され、また中国残留日本人の歴史性を共有することで、中国帰国者というエスニシティへの所属感、構成員間の同胞感、一体感が芽生えていった。

なおこの運動で見られる中国帰国者のアイデンティティは、差別化/周縁化された人々が対抗のために、自らが依って立つべき基盤、場所、位置を見つけて承認を求めるアイデンティティ・ポリティクス<sup>6</sup>の第一の形態(Hall 1990b=1999b: 81-82)に該当する。単なる戦略的な本質主義だけではなく、歴史/社会的に構築されてきた「中国残留日本人」の位置づけをめぐる「陣地戦」(Hall 1990a=1999a: 83)でもあった。それには2つの側面がある。ひとつは、法廷内における戦争被害者か棄民かという、日本人をめぐる政治的カテゴリーとしての中国残留日本人をめぐる戦いである。こうした司法の場においては、既述の通り、政治的社会的に付与された物語性が要求される。もうひとつは法廷外の社会運動において、政治的カテゴリーを行使しながら、中国的な文化を抗争の道具として用いることによって、中国文化を持つ日系人という中国帰国者カテゴリーへの位置取りの動きである。

このような位置取りの展開から顕在化してくるのは、国民化と位置づけをめぐる闘争しつつ、「エスニックの変則者」(Eriksen 2002=2006: 126)としての中国帰国者の姿である。ここでいう「エスニックの変則者」とは日本人の血統を持ちながら、中国的な文化背景を背負う「どっちつかず」の位置性であり、「どちらでもなければ」「どちらでもある」という曖昧な中国帰国者の存在である。それは中国帰国者特に中国残留日本人らがこれまで、中国で



は「日本人」、日本では「中国人」だといわれ、マイノリティ化されてきたのに抗して行われた「どっちつかず」の「エスニックの変則者」としての中国帰国者への位置取りであり、ハイブリットな戦略を用いながらの文化の政治である。ある中国残留日本人孤児は自らのこのような位置取りに関する心境を次のように語った。

もう、どうしようもないよ。だって、いまさら、中国に帰ったとしても、中国人だと見られるわけでもないし、だからと言って、日本にいながら華僑だと見られるわけでもない。逆に、日本人からは、日本人だと見られることもない。

こうした国家賠償訴訟運動の全国的な展開は、中国残留日本人ないし中国帰国者が日本社会における自らの権利や承認を求めるための場所や空間の構築を目指すものであった。このような空間において、中国帰国者らが動員／組織され、多様性を孕みながらもエスニック集団としての意識を共有するようになった。それは「エスニック変則者」としての中国帰国者の活性化、社会的顕在化の始まりであり、位置づけをめぐる位置取りであった。そうした運動から、中国帰国者のディアスポラ性——日本の一エスニック・グループでありながら、中国とは特異な関係を持つ中国帰国者の存在——も表出されていた。

中国残留日本人の国家賠償訴訟は「日本人」としての権利ないしその回復、および、老後保障を勝ち取るための闘いであったとよく言われる。そのため、法廷内での争いのみが注目されがちであった。しかし運動全体で捉えて考えると、「日本人」としての位置だけではなく、「中国人」としての位置づけも、中国帰国者という独自の位置づけも顕在化している。

### (3) 境界文化の多元性

中国残留孤児中川澄子（仮名）を例に、個人レベルにおける境界文化の表出について議論を進めたい。

中川澄子の生年月日は推定 1942 年 3 月であり、養母の家に入った経緯は明確ではない。養父は京劇の芸人で、養母はかつて遊女をしていた。彼女は 1950 年から学校に通い始め、中学校を卒業してから、小学校の教師になった。自由恋愛を経て 1960 年に結婚し、3 人の子供を出産した。1979 年、中国残留日本人孤児に認定され、1984 年に訪日調査に参加した。肉親は判明しなかったが、1986 年、支援者の援助を得て日本に永住帰国し、所沢定着促進センターで 4 ヶ月間を過ごした後、K 市の T 団地に定住した。その後、就職して自立生活を送っていたが、2002 年、60 歳で定年退職した。地域の国際交流活動や中国残留日本人孤児の社会運動、2002 年以降の国家賠償訴訟運動にも積極的に参加し、K 市の中国残留日本人孤児の中心人物の 1 人として先頭に立ってがんばってきた。このように彼女は中国残留日本人が体験しうる社会の場をほとんど経験しており、その体験には一定の代表性を持っている。

訪日調査や国家賠償訴訟運動といった公の場においては、中川は付与された物語に沿った

形で、犠牲者的な物語として「わずかな金で売られた自分、同級生からの孤立、右派として批判された養父、下放される自分」や、祖国の物語として「祖国を思う気持ち、祖国に帰りたい思い」を語っている。これらの語りをもって解釈すれば、彼女は、日本人としての国民性と中国残留日本人の位置取りを表出していると言える。しかしこれは決して本質的なものではなく、発見と想像のプロセスを経て実践されたものである。1979年、自分が日本人孤児だと知った時の気持ちを、彼女は次のように振り返る。

日本人孤児だと知らない時はとても幸せだった。

知った後はいろいろ悩み始めた。このように社会に差別され、夫からも見下される。友人がなく、社会的地位も上昇できない。これらは私の歴史背景によってもたらされたのだ、と。その時から、私の心に暗い影が生まれた。

中国残留日本人という位置取りを意識するようになって、中川の過去はそれに規定され再定義されるようになり、過去の体験が中国残留日本人の犠牲者的な物語へと回収されていった。こうした犠牲者的な感覚や位置取りの悩みが「暗い影」として自己を悩ませるようになったのである。この影に光をもたらししたのは訪日調査である。

訪日調査の15日間は映画スターみたいな生活を送っていた。毎日が豪華で。人生のなかで最も幸せな時だった、その15日間はね。永遠に忘れられないよ。厚生大臣とも会って一緒に踊ったり、宴会で発言したりもした。

訪日調査の15日間は、中川に新たな希望を与えた。その後、中国国内の政治と日中関係の悪化への恐れ、苦痛に感じていた婚姻生活からの脱却、自己の夢実現と子供たちのためだと考えて、日本への永住帰国を決意した。こうした内的変容を経て、中川は中国残留日本人という位置を取り、日本に永住帰国したのである。社会運動といった公の場では支配的な物語に従った形で自己を語り、社会での発言権を獲得していった。

訪日調査や民間団体の支援活動といった囲い込まれた空間において、日本人としての戦争被害者と中国残留日本人という位置づけは、周囲と何ら摩擦を起こさない形で表出されていったが、しかしこれらの場を離れて自立し、日本社会と対面する空間が拡大していけば、下記のように、異なるまなざしも向けられるようになる。

日本に帰ってきてから、日本人は私を中国人と呼ぶ。それが原因で会社の人とけんかしたこともあった。本当に悔しい。日本人孤児はこんな苦勞してやっと帰って来たのに、なぜ認められないのか。なぜ私を中国人と呼ぶのか。それは私に対する最大の侮辱である。

中川は、自立して清掃の仕事をしていた。現場が変わるたびに新しい出会いがあり、彼女を「中国人」とみなすまなざしに直面することが少なくなかった。なぜなら「日本人＝日本語を話す」という支配的な規範から、中川が逸脱しているとみなされたからである。日本社会におけるこれらの体験は、社会運動や訴訟の場において政策の誤りを訴えるレトリックとして用いられ、アイデンティティ・クライシスをもたらす要因として問題視されている。しかし、このような場を中国残留日本人孤児らがいかなる実践をもって克服していったのかはほとんど注目されてこなかった。

何年か経つと、日本人に「あんたはチャイナ？ どうやって日本に来たのか。日本人と結婚したのか」と聞かれると、「はい、私は日本人と結婚した、チャイナですよ」と答えるようになった。

今はもう全部認める。なぜなら、もうどうでもいいんだよ。中国人でもいい、日本人でもいい。それがどうかした？ 自分が日本人だと言っても日本政府が認めないし、今はもう成り行きに任せた。もう考え抜いた。もうどうでもいいんだ。中国残留孤児と言っても誰もわかってくれないし。

このように、職場でのまなざしによって、中川はチャイナ（中国人）という位置を取るようになっていく。この際、自己がカテゴリー化されるのと同様に、彼女自身もまた他者をカテゴリー（中国残留日本人を知らない日本人）化して位置を取っている。このような位置取りは、単に受動的ではなく、能動的に行われたのである。彼女が自己を「清掃天使」と揶揄し、同僚に「私は日本語がわからないけど、じゃ中国語を話してみなさいよ」と逆に聞いたように、自己の中国文化資本を強調して、職場の差別克服のために能動的に位置取り戦略を用いたのである。

また中川は、日本に永住帰国してから、日本人に中国語を教えたこともあった。筆者が聞き取りをしている最中、彼女はかつて生徒を紹介してくれた日本人の方と出会い、挨拶を交わした。戻ってきた彼女は、「今後も機会があれば、また誰かに中国語を教えたい」と話し、その意欲を見せた。このように、多文化共生や日中友好を目指す日本社会において、中国人としての位置取りは、中国残留日本人の社会適応にも役立っているのである。

以上のように、日本社会で生活する中川は自己の位置を、それぞれ異なる実践の場において、中国残留日本人孤児、日本人、中国人を使い分け、その異なる位置取りによって問題に対処してきた。それを規定するのは何らかの国民性ではなく、場の磁力と、当事者の知識の在庫と状況定義、様々な場で培ってきた経験にほかならない。

#### 4. 結びにかえて

ディアスポラ的な移動期に突入した中国帰国者は日中両国に限らず、第三国にも移動するようになっており、日本社会での実践も十人十色である。そこには、中国人としての「我」

や日本人（中国残留日本人もしくは日系人としての中国帰国者）としての「わたし」のほか、新しい「自己」が常に加えられていく。それはけっして消去法的な計算ではなく、常に新しいものが加わり、生成的である。そうした生成的な境界文化に関する民族誌学的研究は今後の課題として挙げられる。また外的境界だけではなく、中国帰国者の内部に存在するエスニシティ（漢族、朝鮮族、モンゴル族と満族など）、出身地域（都市と農村）、階層と文化資本といった境界や、中国帰国者の境界文化による国境の多孔化と新しい社会空間の生成に関する詳細な調査検討も必要である。

こうした生成的な境界文化の探求には、現時点において、次のような意義があると考えられる。第一に国民国家を分析単位としてきた従来の社会学の限界の超克、第二に固定化された自己ではなく、常に生成される自己（アイデンティティのパフォーマティヴィティの実態把握）、第三にトランスナショナルな存在としての中国帰国者と越境する「公共圏」生成の可能性の析出、第四に「歴史なき民」の生活世界の「残余」に光を与えることである。これにより、国民国家を分析単位としてきた従来の西洋社会学の価値観によって、知的関心の周縁に追いやられがちな集団／個人の境界文化のありようを浮き彫りにし、またそうした境界文化の民族誌を通じて、境界をめぐる共創的な関係性の明晰化、および、新たな連帯やより豊かな社会空間の創造につながる想像力の醸成につながっていける。本稿の最後に際して、こうした生成的な境界文化の探求とポスト西洋社会学との関係について触れたい。

ベックのリスク社会とコスモポリタン理論における近代化の多様性の析出の要求に対応して生まれたポスト西洋社会学という概念であるが、その意義は既に触れたとおりである。しかし、西洋と非西洋の社会学者の文化的交流に基づいて形成／発展するポスト西洋社会学は単数形ではなく複数形であり、常に生成の過程にあるといえよう。またフランスの社会学者ラロー（羅蘭, Laurence Roulleau Berger）は、ポスト西洋社会学に向けて関連社会学（connected sociology）を提唱し、集団と個人とくにマイノリティの多元的な声を聞き取ることで、異なる社会でのダイナミックな混淆と相互作用の明晰化を目指した（羅蘭 2017b : 83）。中国帰国者の生成的な境界文化の探究も同様な目的を持っていることから、ポスト西洋社会学のひとつとして把握できる。

しかしコスモポリタンの転回の視角においては、境界はしばしば溶解された状態として想定されている<sup>6</sup>。にもかかわらず、筆者が境界に焦点を定めて研究するのは、グローバリゼーション時代における人の移動がさらに活発化し、すべての人びとが身体的な移動があるか否かにかかわらず、移動によってもたらすさまざまな境界を常に生きざるを得ない状態に投げ込まれているからである。分離の認識があつてこそ結合が可能となり、境界の認識は断絶と排除を意味するだけではなく、むしろつながりと包摂の可能性をも示唆している。こうしたジンメルが「橋と扉」で展開した議論だけではなく、境界を考える際は国民国家論、エスニック境界論、および、エスノメソドロジーのカテゴリー化理論の知見も示唆に富んでいる。また非西洋社会である日本と中国の境界のゆらぎを生きてきた中国帰国者の生活世界を研究することは、単なる移民ではなく、本国帰還者や内なる他者といった視点をも含んでお



り、ポスト西洋空間とポスト西洋社会学を考える格好の事例であるとも言えよう。今回の国際カンファレンス「ポスト西洋社会学」の参加を通じて、そうした可能性を感じ取ることができた。もちろんそれに向けての理論的整理や更なる研究調査が今後の課題として浮かびあがったことは言うまでもない。

### 【付記】

本稿は筆者のこれまでの研究成果をもとに、加筆・修正したものである。調査・執筆にあたり、科学研究費（若手 B）「中国帰国者の包摂と排除に関する総合的研究」（研究番号：15K17183）、科学研究費（基盤 B）「中国の越境的移動・境界侵犯・異種混合より生成する新しい『社会』に関する実証研究」（研究番号：15H05189、研究代表者：首藤明和）からの援助を受けた。報告の際は、矢澤修次郎と西原和久などの諸先生からも貴重なご意見を頂いた。この場を借りて謝意を表する。

### 注

1. なおここで指摘したいのは、「ポスト西洋社会学」という概念を用いた議論である。実際、日本における社会学の史的展開を見ると、ポスト西洋社会学が指し示そうとする内容—西洋社会学の現地化、現地に根ざした社会学創設の試み、西洋社会学者との学术交流—にかかわる学術活動は中国に増して活発だったと言える。
2. こうした試みとして着想するに際しては、ナショナルな領域や枠組みを前提としてきた思考回路の脱構築や、国民国家を所与とする従来の社会科学の枠組みの組み替えを目標とするグローバリゼーション研究（伊豫谷 2002）から多くの示唆を得ている。
3. 中国残留日本人が日本へ帰国できないのは、日中間に国交が締結されていなかったとよく言われるが、1958年から1972年までの間にも約700人が日本へ永住帰国したことを考えると、その解釈は必ずしも妥当ではない。
4. 管見の限り、こうした物語性は、1958年以降も中国に残留し、1972年以前に永住帰国した日本人の語りからほとんど見られない。その一例として、個別引揚者西条正の語りが挙げられる。その詳細に関しては、南（2011）にて論じた。なおこの時期の個別引揚者の語りは戦争犠牲者というストーリーがみられるものの、戦後中国の政治運動の変遷に集中する傾向が見られる。
5. なおメディアに表出された斉藤の語りからも、「私」という個や家庭に関する物語を看取することができる。しかしそうした語りは、制作者の編集や中国残留日本人の支配的な物語によって不可視化されている。
6. 境界文化の研究においても、境界の溶解は重要な研究対象である。そもそも境界を手がかりに人びとの実践文化を分析するのは、境界を画定することではない。むしろそうした危険性を意識しつつ、回避することに努めるべきであり、その目的は、差異との共存を可能にする社会構築に向けて、境界の生成と溶解のメカニズムを分析することにあると言えよう。

## 引用文献

### [日本語文献]

- 伊豫谷登士翁, 2002, 『グローバリゼーションとは何か——液状化する世界を読み解く』 平凡社.
- 梶田孝道, 1999, 「乖離するナショナリズムとエスニシティー『日系人』における法的資格と社会的現実との間」 青井和夫・高橋徹・庄司興吉編『市民性の変容と地域・社会問題』 梓出版社
- 厚生援護局, 1987, 『中国残留孤子』 ぎょうせい.
- 竹川英幸, 2003, 『捨てられた。生き延びた。負けてたまるか!』 碧天舎.
- 南誠, 2011, 「国籍とアイデンティティのパフォーマティビティ」 陳天璽・近藤敦・小森宏美・佐々木てる編『越境とアイデンティフィケーション——国籍・パスポート・IDカード』 新曜社.
- , 2015, 「中国帰国者の境界文化における国民性の表出」『日中社会学研究 23』 日中社会学会.
- , 2016a, 『中国帰国者をめぐる包摂と排除の歴史社会学：境界文化の生成とそのポリティクス』 明石書店
- , 2016b, 『「中国帰国者」系日本人：生成的な境界文化の可能性』 駒井洋監修 佐々木てる編『マルチ・エスニック・ジャパニーズ：〇〇系日本人の変革力』 明石書店.

### [中国語文献]

- 謝立中, 羅蘭 (ラロー) 編著, 2017, 『社会学知識の建構：後西方社会学的探索 (THE FABRIC OF SOCIOLOGICAL KNOWLEDGE: The Exploration of Post-Western Sociology)』 (中文) 北京大学出版社.
- 謝立中, 2017, 「什么是“後西方社会学”？ (ポスト西洋社会学とは何か)」 謝立中, 羅蘭編著『社会学知識の建構：後西方社会学的探索』 北京大学出版社.
- 羅蘭 (ラロー), 2017a 「後西方社会学和社会学知識の構築 (ポスト社会学と社会学知識の構築)」 謝立中, 羅蘭編著『社会学知識の建構：後西方社会学的探索』 北京大学出版社.
- 羅蘭 (ラロー), 2017b, 「後西方空間和社会学研究 (ポスト西洋空間と社会学研究)」 謝立中, 羅蘭編著『社会学知識の建構：後西方社会学的探索』 北京大学出版社.

### [英語文献]

- Isajiw, Wsevolod W., 1974, “Definitions of Ethnicity,” Frederik Barth, ed. *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Differences*, Boston: Little Brown and Company. (=1996, 有吉真弓等訳「さまざまなエスニシティ定義」 青柳まちこ監訳『「エスニック」とは何か』 新泉社)
- Cohen, Anthony P., 1985, *The symbolic construction of community*, Ellis Horwood. (=2005, 吉瀬雄一訳『コミュニティは創られる』 八千代出版)
- Barth, Frederik, 1969, “introduction Ethnic Groups and Boundaries,” Frederik Barth, ed., *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Differences*, Boston: Little Brown and Company. (=1996, 内藤暁子・行木敬訳「エスニック集団の境界」 青柳まちこ監訳『「エス

ニック」とは何か——エスニシティ基本論文選』新泉社, 23-72)

Brubaker, Rogers, 1992, *Citizenship and nationhood in France and Germany*, Harvard university press. (=2005, 佐藤成基/佐々木てる監訳『フランスとドイツの国籍とネーション——国籍形成の比較歴史社会学』明石書店)

Butler, Judith, 1990, *Gender trouble: feminism and the subversion of identity*, New York: Routledge. (=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』青土社.)

Eriksen, Thomas Hylland, 2002, *Ethnicity and nationalism*, Pluto. (=2006, 鈴木清史訳『エスニシティとナショナリズム』明石書店.)

Hall, Stuart, 1990a, “Cultural identity and diaspora,” Rutherford, J ed., *Identity*, London: Lawrence & Wishart. (=1998b, 小笠原博毅訳「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』Vol. 26-4.)

———, 1990b, “Cultural identity and diaspora,” Rutherford, J ed., *Identity*, London: Lawrence & Wishart. (=1998b, 小笠原博毅訳「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』Vol. 26-4.)

## The possibility of “Chugoku–kikokusha (Returnees from China)” study: An investigation into generative boundary cultures

Makoto MINAMI (XueJiang LIANG)

The purpose of this report is to examine relations with Post–Western sociology to an investigation into generative of the generative bordary cultures of the “Returnees from China (*Chugoku-kikokusha*).”

“Returnees from China (*Chugoku-kikokusha*)” refers to residual Japanese residents and their families who have settled in Japan permanently since 1972 when the Sino–Japan diplomacy was signed. There are no accurate statistical data, but there are about 100,000 Chinese returnees living in Japan.

Boundary cultures is not the existence of people embedded in the modern nation–state system but to the practical culture of people living the process of integration and differentiation created by the boundary. It is not an essentialist entity with a clear boundary but a heterogeneous mixture created through mutual negotiation and penetration of culture with people involved in it. This report uses this concept to examine the possibility of searching for this generation’s border culture in post–Western sociology after having introduced the experience of movement and the politics of the border culture for the Chinese returnee.

Boundary cultures is not something pre–set as if the future had been decided as roots, rather the history of building that boundary/Re–discovering/setting of a place of social structure and the place of overwhelming violence hidden in rationality and legality within such structure and imaginative place, and routes that show infinite possibilities in the future will appear. Such a “boundary space” is a suppressed place, a place of conflict, a place with radical opening possibilities and possibility of creating a new culture. The knowledge that boundary culture brings is directed not only to the parties involved, but also to other people. This is a result of everyone being unnecessarily actively or negatively involved in building that boundary. It seems that new people develop a solidarity among people who seem to be segregated only after understanding the mechanism of such construction, and thus patthe way for a better symbiosis society to be developed.

**Keywords:** Chinese returnee (*Chugokukikokusya*), Boundary cultures, transporter, performativiity, Post–Western Sociology